趣旨説明

天野真志

よろしくお願いいたします。国立歴史民俗博物館の天野です。本日のシンポジウムの趣旨について説明させていただきます。皆さんのお手元にあるプログラムの裏側に、フォーラムのチラシの趣旨文をそのまま印刷したものがございますので、これをご覧になりながらお聞きください。

本日のフォーラムでは、「地域資料保全のあり方を考える」をテーマに設定いたしました。皆さんもご存じの通り、最近、全国各地で大きな自然災害が多発しています。それらの自然災害によって、多くの人命やライフラインだけではなく、歴史文化に関わる様々な資料にも大きな被害が出ています。その過程で、災害によって発生した多くの被災資料をどのように救済していくか、またそれらをどのように地域に還元していくか、といった問題に取り組む活動、いわゆる「資料ネット」と呼ばれるものが、全国各地に広がってきています。この趣旨文を作成した時は二五団体でしたが、今年の台風による被害をきっかけに、長野県の方でも「信州資料ネット」が設立されまして、現在では二六団体になっています。

そして今回、東海地域においてこのフォーラムを開催することになった一つの背景として、皆さんもご承知の南海トラフ巨大地震への対策があります。この地震は、三〇年以内にかなりの確率で発生すると言われていますし、もし発生した場合、この地域に甚大な被害をもたらすことが確実視されています。また、それだけではなく、異常気象による大水害は、日本全国のどこにおいても起こりうるものであり、もちろん東海地域も例外ではありません。

これまでにも東海各地域では、被災資料のレスキュー活動が行われ、特に三重県と静岡県では資料ネットの取り組みも進められてきました。また愛知県でも、博物館協会や県の文化財保護室による取り組みが行われていることは、我々も注視しているところです。今回のフォーラムでは、そうした各地域での様々な取り組みを踏まえつつ、東海地域として連携していくことの意味について考えていきたいと思います。特に、この会は「大学フォーラム」

と銘打っていますように、大学およびその関係者が地域の歴史文化に対してどのようなことができるのかという観点から、この企画を構想いたしました。これは、直接的には「東海資料ネット」の設立を目指すものですが、そのなかで大学関係者の役割を想定しつつ、行政・博物館との連携、市民の皆さんとの協業が重要であり、一連の連携を東海地域としてどのように展開するのかを考えるのが核心的なテーマになっています。

このフォーラムは、人間文化研究機構と名古屋大学大学院人文学研究科が主催するものです。現在、当機構では、「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」を推進しています。その中で二〇一八年度から、国立歴史民俗博物館を主導機関として、地域の資料保全の中核となる大学や資料ネットとの連携を強化して、地域の歴史資料の保存・継承を推進し、それによって展開する新しい地域研究と社会発信を進めているところです。今回はその一環として、「東海資料ネット」の設立を目指す取り組みについて、皆様と考える機会を設定させていただきました。

フォーラムの第二部としてのこのシンポジウムでは、四つの報告を用意しています。最初に、長年の編纂事業が終わりつつある愛知県史における資料調査の実施状況について、県史編さん室の加藤規博さんにご報告いただきます。次の岡田靖さんの報告では、古文書等の紙資料ではない、彫刻文化財等いわゆるモノ資料の水害対策がどのように進められているのかを、東日本大震災を事例にお話しいただきます。休憩を挟みまして、先行する各地の資料ネットの取り組みとして二つの報告がございます。斎藤善之さんには、宮城資料ネットの東日本大震災などにおける取り組みをご紹介いただいたうえで、これを東海地域の活動にどのようにつないでいくかについてお話しいただけると思います。また今津勝紀さんには、予防的観点から活動されてきた岡山での資料ネット活動について、その取り組みをご報告いただきます。さらに三名の方にコメントをいただきながら、「東海資料ネット」をどのように

設立し展開していくのかを議論していきたいと思います。どうかよろしくお願い申し上げます。

（あまの・まさし　人間文化研究機構国立歴史民俗博物館）